

ストーリー

◆日本最古の「神坐す山」に生まれた「地藏信仰」

大山は、『出雲国風土記』の国引き神話に「伯耆国なる火神岳」として登場する、文献にみえる日本最古の神山です。山頂からの雄大な眺めは、大山の裾野に伸びる弓ヶ浜半島を引き綱にして能登から土地を引き寄せ、その綱を繋ぎとめた杭が大山だといういにしへの神話の世界をほうふつさせます。

中腹の大山寺に祀られる地藏菩薩は、山頂の池から現れたとされ、水を恵み、現世の苦しきから万物を救うと信じられた仏さまです。

このため、人々は延命をもたらす「利生水」と地藏菩薩のご加護を求めて参詣し、五穀豊穡も祈願しました。このように地藏菩薩と水とが密接に結びついた大山独特の地藏信仰が、鎌倉時代以降、「大山信仰」として伯耆のほか山陰、山陽諸国にまで信仰圏を広げて行きました。



◆信仰と結びついた全国唯一の牛馬市

地藏菩薩が生きとし生けるものすべてを救う仏さまであることから、平安時代に大山寺の高僧、基好上人が、牛馬安全を祈願する守り札を配るとともに、山の中腹に広がる牧野で牛馬の放牧も奨励しました。こうして大山の「牛馬信仰」が広まって行きました。平安時代の説話集『今昔物語集』からは、遠方からの参詣者が牛馬に供物・荷物を運搬させていたことがわかります。生計の柱である農耕に欠かせない牛馬の飼育でしたので、人々は牛馬を曳き連れて大山寺に参って守り札をいただき、牛馬にも「利生水」を飲ませてその延命を祈りました。さらに守り札は牛舎の柱に貼って安全を祈り続けました。

牛馬の育成に適した大山山麓の牧野で育った体格の良い放牧牛は参詣者の注意をひき、また、参詣者が曳き連れてきた牛馬もあって大山寺の春祭りなどに牛くらべ、馬くらべが開かれました。これが発端となって、鎌倉時代以降、次第に牛馬の交換や売買が盛んに行われ、やがて市に発展していったと伝わっています。

江戸時代中頃になると、大山寺が積極的に牛馬市の経営に乗り出し、市は大山寺境内の下にある「博労座」で春祭りに開かれることになりました。この寺の庇護のもとという特徴が、信仰が育んだ全国唯一の「大山牛馬市」とされる理由です。やがて祭日以外にも市が立ち始め、西日本各地から多くの人や牛馬が集まるようになり、やがて日本三大牛馬市のひとつと称されるほど隆盛を極めました。そのようなことは、歌川広重の作と伝わる扇絵にもいっきと描かれています。また、その頃から売買が成立した祝い酒の場で歌われた「博労歌」にも「博労さんならここらが勝負、花の大山博労座、西の番所は備前か備中、東の番所は但馬の牛か、中は出雲か伯耆の国か、隠岐の国から牛積んだ船は淀江の浜に着く」と各地から市に集まる賑わい振りが謡われています。とくに足腰の強さで人気の高かった隠岐の牛が着くと、淀江の港には茶店が並び、見物人や牛を商う博労たちで活気に満ちました。



牛馬市は、大山寺の手を離れた明治維新以降も地域の経済を支え、明治中頃には年5回まで市が増えて、ついには年間1万頭以上の牛馬が商われる国内最大の牛馬市にまで発展しました。

一方で、明治政府が食用牛増産のため輸入雑種牛との交配を奨励したものの、交配牛の品質が不評だったことなどから、県内の牛の頭数は急激に減少し農家の生計を圧迫しました。これに危機感を抱いた鳥取県が優れた和牛を復活させようと、牛馬市で商われた県産牛を中心として、大正9年に全国に先駆けて登録事業を開始しました。その後「大山牛馬市」は、鉄道の発達などの影響で昭和12年の春にその幕を閉じますが、登録事業はその後も和牛(肉牛)の品種改良に大いに活用されて、今、世界が注目する「和牛」誕生へのいしづえとなりました。

◆「大山信仰」と牛馬市をささえた「大山道」と道沿いの人々の暮らし

中世以来、大山を西国諸国に広く及ぶ大山信仰圏と牛馬流通圏の中心に位置づけ、その往来を支えたのが大山寺から放射状にのびる「大山道」(坊領道、尾高道、溝口道、丸山道、横手道、川床道)です。春祭りと牛馬

市の日の前後は、国境の番所での通行人改めも特別なはからいがされたほど、多くの人々が往来しました。このため、大山道沿いの博労宿や参詣者の宿も相次いででき、大いに繁盛しました。

横手道沿いで博労宿が軒を連ねた^{かぎりあき}下蚊屋や^{みつくえ}御机の街道筋には往時の面影が、また、坊領道沿いの集落では各家で仔牛生産をした家屋の配置や牛繋ぎ石などが今も残っています。とりわけ、所子の農家では、牛が母屋と同じ屋敷地の中に建てられた^{うまや}厩で飼われ、大山の山頂で汲まれた霊水や摘まれた薬草を仔牛に含ませるなど、牛馬市に出す牛を大切に育てていた当時のようすをよくとどめています。



坊領道沿いの所子地区の町

また、横手道には山陽筋からの途中で参詣が困難となった人が大山を望んで拜むための鳥居や、女人禁制の時節などに女性が拜礼する場所だった「文殊堂」、川床道には^{こけ}苔むした石畳道、各道の道端には地藏菩薩にちなむ一町地蔵などが残っています。川床道にある^{ひといきざか}一息坂峠では、江戸時代中頃に地元の人が、春祭りに参詣する人々にふるまい始めた湯茶や精進料理の接待が、いまでも代々続けられています。

参詣者の携帯食として親しまれた食が「大山おこわ」です。山の幸に恵まれた大山山麓では、ワラビ等の山菜やタケノコ、栗といった具材と餅米を混ぜて蒸したおこわが祝い膳には必ず出されました。そのおいしさと餅米ならではの日持ちと腹持ちのよさから、いつしかそのおにぎりが大山参詣の携帯食として喜ばれるようになったのです。基好上人が栽培を奨励したと伝わる蕎麦を挽いた「大山そば」も牛馬市でふるまわれ、市の隆盛とともに大山の名物となっていきました。この「大山おこわ」「大山そば」は今も大山を代表する味覚として親しまれています。



大山おこわ

◆裾野に広がる「大山信仰」

「大山信仰」に由来する水にゆかりある行事として、山中の池から水を汲み清めとする「もひとり神事」や「池さん神事」、たる酒を池に注ぎ、その水を汲んで持ち帰って田に流す雨乞い祈願などが今も続いています。また、五穀豊穡を祈る風習として、田植え前に^{おわがみやまじんじやおくみや}大神山神社奥宮で豊作を祈る「山入れ」の行事や、伯耆やその周辺諸国の田植唄で謡われる「大山歌」などもあります。

伯耆では、子どもは数えで2歳が厄年と言われ、親が背負って大山寺に初参りする「二つ児詣り」や数え13歳で無病息災を祈る「十三詣り」があり、大山土産の飴を持ち帰って村人に配りました。



もひとり神事

山陽筋からは、縁者を失った人がはるばる大山寺を訪ね、地藏菩薩の救いを願って^{さい かわら}賽の河原で供養しました。これらも「大山信仰」に由来する習俗です。

◆「大山さんのおかげ」

このように、水の恵みに延命を求める地藏信仰に由来する「大山信仰」と「牛馬信仰」は、牛馬市の隆盛も手伝って西日本に大きな信仰圏を形成しました。それは、あたかも大山からの天恵の水が伏流水となったがごとく、長い歳月を経て人々の生活文化の中にしみわたり、静かに根付いたものです。そして、とりわけ裾野に暮らす人々は「大山さんのおかげ」と日々感謝しつつ大山を仰ぎ見続けているのです。

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
①	大山 (だいせん)	未指定	中国地方最高峰。稀有な自然にも恵まれ、大山 ^{おき} 隠岐国立公園の核をなす山。いにしえより信仰の対象とされ、日本四名山にも数えられる霊山である。 この地域のランドマークであり、シンボリックな存在として、ストーリーの中心に位置する。	大山町、伯耆町、江府町
②	鉄製厨子 (てつせいずし)	国重文 (工芸品)	承安 2 (1172) 年に大山寺周辺の地主・紀成盛が大山寺本社 (大智 ^{だいち} 明権現社) の再建に際して新たな本尊となる金銅製の地蔵菩薩像とそれを納める厨子を鑄造寄進したもの。銘板にこの再建事業の最高責任者として当時の大山寺の最高位にあった基好上人の名が見える。	大山町
③	大神山神社奥宮 (おおがみやまじんじゃおくみや)	国重文 (建造物)	神仏習合であった大山寺において、地蔵菩薩の化身である大智 ^{だいち} 明権現を祀った本社。現存建物は文化 2 (1805) 年に再建された権現造の社殿である。 長く地蔵信仰を核とする大山信仰の中心施設だったが、明治 8 (1875) 年に神仏分離によって大山寺が解体された際に、大神山神社奥宮と定められた。	大山町
④	大山寺本堂 (だいせんじほんどう)	国登録有形 (建造物)	明治 36 (1903) 年に大山寺が再興された際、大山寺中門院の大日堂が新本堂とされた。 その本堂が昭和 3 (1928) 年に焼失したため、昭和 26 (1951) 年に再建されたのが現在の大山寺本堂で、神仏分離によって旧本社から取り除かれた地蔵菩薩を祀った。今日 ^{こんにち} の大山の地蔵信仰の中心をなす堂宇である。	大山町
⑤	大山御幸 (だいせんみゆき)	町指定文化財 (美術工芸)	大山寺の春祭りには、七社神輿の行列が出て盛観を極めた。これを見物するのも参詣者たちの楽しみであった。今も大山御幸として行われ、神輿は町指定文化財となっている。稚児行列とともに地域住民が参加する行事として賑わっている。	大山町

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
⑥	博労座 (ばくろうざ)	未指定	大山寺付近の広大な牧野周辺で開催されていた牛馬市が、享保15(1730)年に改革されて、組織や制度が整えられた。 大山寺境内の前方に広がる広大な草地が牛馬取引会場の博労座と定められ、昭和12(1937)年までこの場所で多くの牛馬の取引が行われた。	大山町
⑦	大神山神社奥宮の石畳道 (おおがみやまじんじやおくみやのいしだたみみち)	未指定	牛馬市が盛んな頃に整備された大山寺本社の大智明権現社と本坊 <small>まいらくいん</small> 西薬院へ向かう参道として残された延長700mの石畳道。 日本一長いと言われるこの石畳道が、大山信仰が盛んだった頃の様子をよく伝えている。	大山町
⑧	大山道(尾高道) (だいせんみち(おだかみち))	未指定	大山道の一つで、当地域の中世の要衝であった尾高城 <small>おだかじょう</small> と大山寺を結んだ古くからの参詣道で、江戸時代には旧会見郡や米子城下町の商人などが多く行き交う主要参詣道だった。	米子市 大山町
⑨	大山道(坊領道) (だいせんみち(ぼうりょうみち))	未指定 (一部、国選 定 歴史の道)	大山道の一つで、大山寺と大山北麓の大山寺領内の村々、鳥取藩領の淀江港、淀江宿及び御来屋宿などの地域を結んだ南北筋の主要な参道。	大山町
⑩	大山道(溝口道) (だいせんみち(みぞくちみち))	未指定	大山道の一つで、出雲街道の溝口宿と大山寺とをつないだ道。樹水別れで横手道に合流する。参詣者・牛馬を曳いた博労が通った参詣道。	伯耆町
⑪	大山道(丸山道) (だいせんみち(まるやまみち))	未指定	大山道の一つで、大山寺の代官所があった丸山から「分けの茶屋」で尾高道に合流するまでの一里の道。 牛馬市が盛んになってからは博労宿もでき、博労たちは、春祭り前日から丸山に宿をとり、当日の早朝に出立した。町並みや道の雰囲気は往時の様子がよく伝わる。	伯耆町
⑫	大山道(川床道) (だいせんみち(かわとこみち))	未指定 (一部、国選 定 歴史の 道)	大山道の一つで、倉吉方面からの参詣者や牛馬を曳く博労が通った道。 近世に篤信者が整備した石畳が今も良く残り、往時の人と牛馬が行き交った姿をよく伝えている。 現在も軽ハイキングコースとしてよく利用されている。	大山町

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ(※3)	文化財の所在地(※4)
⑬	地蔵滝の泉と地蔵滝地蔵 (じぞうだきのいずみと じぞうだきじぞう)	未指定	地蔵滝の泉は、大山道(丸山道)沿い にあって、古くから参詣者や博労、牛 馬が立ち寄って喉を潤し、気力回復し て大山寺をめざす憩いの場として知 られた名泉「利生水」。 現在も町の水源となっている。 その傍らに佇む地蔵菩薩の石像は、参 詣者や牛馬の道中の安全を願って、大 山信仰の厚信者によって建てられた ものである。	伯耆町
⑭	榊水地蔵 (ますみずじぞう)	未指定	古くから知られた榊水原の名泉「利生 水」で、人や牛馬が水をいただく場所 として有名であった。元禄9(1696) 年に水が涸れて二年続きの凶作にな ったため、人々は石で榊形を造って石 地蔵を立て、48日間にわたって供養を 行った。これが今も地蔵尊祭として地 域に続いている。	伯耆町
⑮	大山道(横手道)と一町 地蔵 (だいせんみち(よこて みち)といっちょうじぞ う)	未指定 (一部、国選 定 歴史の道)	大山道の一つ横手道は、山陽筋からの 主要参詣道である。沿道には、大山詣 りの参詣者のために、一町(約109m) ごとに道標として地蔵石像が置かれ た。そのほとんどが、地蔵信仰に基 づく他界信仰によって大山寺を訪れた 山陽筋の人々が寄進したものである。	大山町 伯耆町 江府町
⑯	下蚊屋の町並み (さがりがやのまちな み)	未指定	大山道の一つ横手道沿いの下蚊屋村 は、上方や備前方面から博労座に訪れ る人たちの博労宿として栄えた。今も 当時の雰囲気がよく伝わる。	江府町
⑰	大山町所子伝統的建造物 群保存地区 (だいせんちょうところ ごでんとうてきけんぞう ぶつぐんほぞんちく)	国選定 (伝統的建造 物群保存地 区)	大山道の一つ坊領道沿いの所子集落 では、母屋に近い厩 ^{うまや} で牛馬が飼われ、 搾乳や仔牛生産を各屋で行っていた 様子が建物配置から分かる。 集落内には牛繋ぎ石や牛馬万人供養 塔など牛馬と関わる生活の様子が町 並みに残り、大山のもひとり神事で採 取された薬草を仔牛に食べさせた話 も伝わる。	大山町
⑱	文殊堂(もんじゅどう)	未指定	小さな赤い建物で、大山寺の西からの 入り口付近にあたり、女人禁制の時節 などには、ここが女人遥拝所になっ ていた。 堂の西側の広場は、昭和の初めまで大 山牛馬市に往来する牛馬の休み場所 だった。	江府町

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
⑱	「大山おこわ」と「大山そば」 (「だいせんおこわ」と「だいせんそば」)	未指定	<p>【大山おこわ】 大山寺の春祭りや博労座の牛馬市に集まった人たちが、牛馬市や大山参りの弁当として親しんだ食べ物。 現在も大山山麓の伝統食として親しまれ、家ごとに具材や味付けに個性がある。</p> <p>【大山そば】 平安時代に基好上人が牛馬の放牧とともに大山裾野の牧野で栽培を奨励した蕎麦に端を発し、牛馬市で食べられて名物として親しまれた「大山そば」は、現在も大山山麓の伝統食として親しまれている。</p>	大山町 江府町 伯耆町 米子市
㉔	もひとり神事 (もひとりしんじ)	県無形 (民俗)	もとは大山寺の弥山禪定という行で、僧侶にとっては大山登頂が一生に一度だけ許される命がけの行であった。 神仏分離後は大神山神社奥宮が祈祷、霊水汲み、薬草採取を神事として受け継ぎ、現在も執り行われている。大山の原初信仰を伝える貴重な行事である。	大山町
㉕	池さん神事 (硯ヶ池) (いけさんしんじ (すずりがいけ))	未指定	大山の水信仰に端を発する信仰。 大山七ヶ池のひとつ「硯ヶ池」から御神水を汲みとり、清浄潔斎を祈る神事として現在も行われている。	伯耆町
㉖	旧加茂川の地蔵 (きゅうかもがわのじぞう)	未指定	安永年間 (1773 年～1781 年) に宮大工の彦租伊兵衛が、加茂川で亡くなった子どもたちの供養のために、川や橋のもとに 36 カ所の地蔵札所を奉納し、祠堂を建てたのが始まりとされる。 旧加茂川沿いに設けられたこの地蔵札所が、地蔵信仰が大山の裾野まで行き渡っていたことを物語っている。	米子市

構成文化財の写真一覧

①大山 (だいせん)



④大山寺本堂



②鉄製厨子



⑤大山御幸



③大神山神社奥宮



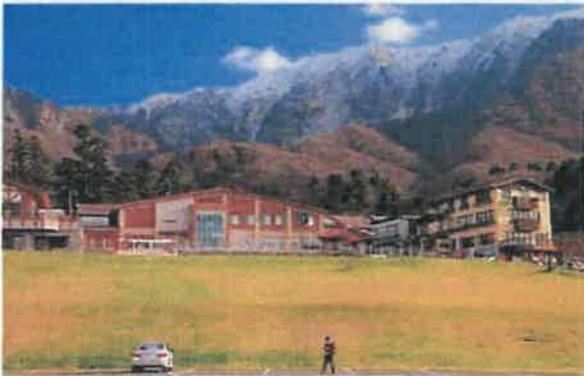
⑥博労座



⑥-1 江戸時代後期



⑥-2 昭和6年

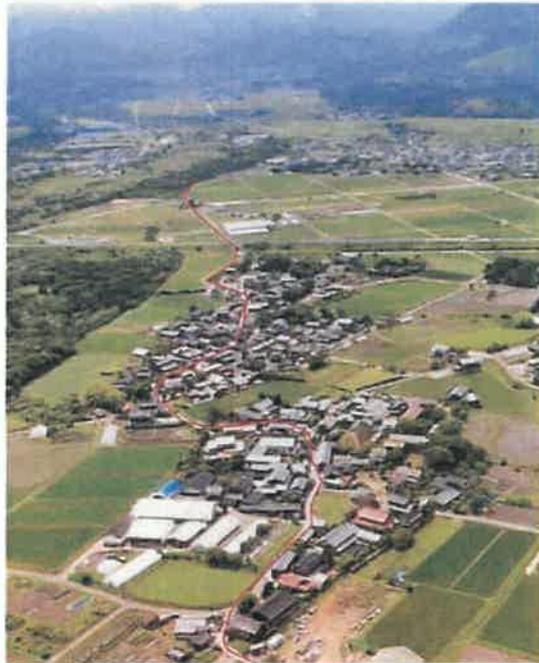


⑥-3 現在

⑧大山道 (尾高道)



⑨大山道 (坊領道)



⑦大神山神社奥宮の石畳道



⑩大山道 (溝口道)



⑪大山道 (丸山道)



⑮大山道 (横手道) と一町地蔵



⑫大山道 (川床道)



⑯下蚊屋の町並み



⑬地藏滝の泉と地藏滝地蔵



⑰大山町所子伝統的建造物群保存地区



⑭榊水地蔵



⑱ 文殊堂



㉑ 池さん神事 (硯ヶ池)



⑲ 「大山おこわ」と「大山そば」



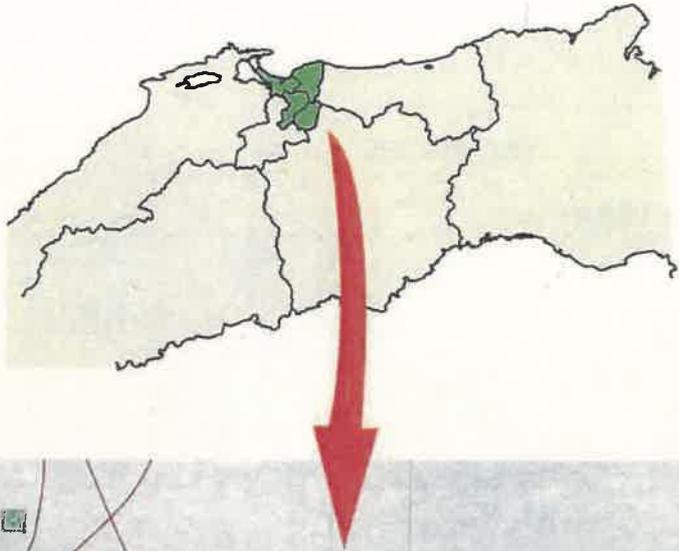
㉒ 旧加茂川の地蔵



㉓ もひとり神事



シリアル型市町の位置図



構成文化財の位置図

